

博物館的機能から見た国営武蔵丘陵森林公園における案内解説型プログラムに関する考察

A Study on the Interpretation Program in Musashi-Kyuryo National Government Park Focused on Its Museum Function

平松 玲治* 堀江 典子* 永留 真雄* 松田 洋* 落合 美浩*

Reiji HIRAMATSU* Noriko HORIE* Masao NAGATOME* Hiroshi MATSUDA* Yoshihiro OCHIAT*

1. はじめに

都市公園領域において、公園施設として位置づけられてきた動物園、植物園、自然生態園や遺跡等の教養施設において、従来、展示解説や各種プログラムが提供されてきたが、近年では、公園内の様々な資源の利活用と利用促進の観点から、環境教育プログラムやガイドツアー、展示解説等のより積極的な充実が図られ、ガイドボランティアの育成・組織化がなされる事例も増えている。このような傾向は、公園領域における博物館的機能の強化として捉えることができると考えられる。博物館とは、資料の収集保管、展示による教育普及、調査研究を一体として行う機関であるが、博物館の領域においても博物館の形態の多様化が進む中で、建物内のみに留まらず野外空間と一体化した博物館等も現れてきており、公園との機能的重複も見られるようである¹⁾。

都市公園における資源の利活用と利用促進を図る上で、博物館的機能が強化・付加されていくこと、あるいは博物館との連携が図られていくことが予想されるが、これらの事項を管理運営手法に具体的に盛り込んでいくためには、都市公園における博物館的機能を伴う活動の意義や役割を明確にしておくことが求められる。このためには、現在、都市公園で実施されている公園利用プログラムの事例を博物館的機能の観点から検証し、基礎的な知見を得ておくことは不可欠と考えられる。

都市公園において特に博物館的機能が期待される施設としては、都市緑化植物園があげられる。都市緑化植物園は博物館に相当する施設である一般の植物園の機能と、公園施設の機能をあわせ持つと考えられ、昭和 50 年に通達された設置運営要領²⁾にあるように、「都市緑化の推進」に資することを目的とした事業展開であることが特徴である。一般の植物園が学術研究の観点から植物の生体及び標本を収集・栽培保存するのに対し、都市緑化植物園は都市緑化の観点から植栽樹種を選択する点で異なる。また、都市緑化植物園が設置されている大規模公園のおもな目的は、レクリエーションへの対応であるのに対し、都市緑化植物園の目的は都市緑化の推進である。このため、他の公園施設に比べて意識の高揚や知

識の普及の面で、積極的に利用者へ働きかけることが求められる。

そこで、本報告では国営公園内にある都市緑化植物園で実施されているガイドツアー事業の事例を対象とし、博物館的機能の観点から検証することで、都市公園における案内解説型プログラムの展開の可能性と課題を探る。

2. インタープリテーションと案内解説型プログラム

今日では、都市公園に限らず、博物館、自然公園、観光施設、市街地等にて、一方的に情報を伝えるのみの従来型の案内解説ではなく、専門的な知識と参加者を楽しませる技術の両方が必要とされる解説活動であるインタープリテーションが重視され、実施されている³⁾。インタープリテーションを具体化するプログラムのひとつとして、わが国では、自然公園における自然解説を行う自然ガイドツアー⁴⁾、都市公園では、都立の植物園、動物園、庭園において、案内人を配置して、公園に関する植物、動物、歴史、景観等について案内解説をするガイドツアー⁵⁾などが実施されている。

本報告では、都市公園におけるインタープリテーションを具体的に展開した案内解説型プログラムであるガイドツアーの実施事例として、大規模都市公園である国営武蔵丘陵森林公園内の都市緑化植物園（以下「武蔵植物園」という）で実施された「都市緑化植物園ガイドツアー（以下「植物園ガイドツアー」という）」を取り上げる。なお、植物園ガイドツアーは、国営公園の中で、職員がボランティアの協力のもと、恒常的に公園の利用プログラムとしてのサービスを提供できる体制を構築した事例として特筆される。

3. 国営武蔵丘陵森林公園都市緑化植物園ガイドツアー

武蔵植物園の植物園ガイドツアーについて、平成 16 年度から平成 19 年度までの実施日・参加人数・ボランティアの参加人数・案内植物名・案内施設及び順路等について記録した「ガイドツアー実施記録」、及びガイドツアー参加者を対象に参加者属性（住所）・入園した入口名・利用満足度・利用頻度等を聴取した「アンケート調査」

*（財）公園緑地管理財団

*Parks and Recreation Foundation

を用いて、その概況及び特徴について整理した。

(1) 植物園ガイドツアーの概要

植物園ガイドツアーは、平成16年4月3日より来園者に対する植物の案内解説の拡充を目的として始まった公園利用プログラムである。実施内容は、武蔵植物園の職員が当日受付により集まった参加者を連れて、植物園内の見本園や圃場等を歩いて移動しながら、展示もしくは自生している植物について、1時間程度口頭にて案内解説するものである。実施頻度は、原則毎週土曜日（なお、平成19年度6月以降は第2・第4土曜日）に実施しており、植物園内で植物を題材とした行催事が開催される際には、関連するメニューのひとつとして、日曜や祝日、場合によっては夜間にも実施している。

平成19年度の実施実績は、配置された常勤スタッフ9人のうち7人（A～G）が携わり、参加者数は866人、ボランティアは20日間に延べ42人が協力した（表-1）。また、平成16年度から平成19年度までの参加者数及び実施回数の累計は3,716人及び219回で、平均すると1回当たりの参加者数は17.0人/回である（表-2）。

表-1 植物園ガイドツアーの実施実績（H19年度）

月	日	解説した植物	案内者	参加者 (人)	ボランティア (人)	備考
4	7	ツバキ	A	16	5	
4	14	カエデ、サクラソウ	A	15	1	
4	21	サクラソウ	A	29	5	
4	28	サクラソウ	A	18	5	
4	29	サクラソウ	外部講師	44		
5	5	サクラソウ	B	19		
5	12	「手紙」の名を持つ花木	C	8	1	
5	19	アヤメ	B	6	2	
5	26	展示植物	D	34	5	
6	9	ムラサキ	A	8		
6	23	ハーブ	E	16	2	
7	14	ヤマユリ	A	2		
7	21	ヤマユリ	A,E	18		
7	21	ヤマユリ	A	11		
7	28	ヤマユリ	D,C	43	1	2班実施
8	11	キツネノカミソリ	B	15	2	
8	25	サルズベリ	E	4	1	
9	8	展示植物(花壇)	F	8	2	
9	22	クスノキの仲間	C	17	1	
10	13	センブリ	A	21	2	
11	17	カエデ類(夜)	C	18		
11	18	カエデ類(夜)	A	21		
11	24	カエデ類	E	18		
11	24	カエデ類(夜)	A,C	50		2班実施
11	25	カエデ類(夜)	G	8		
12	1	カエデ類	A	17		
12	1	カエデ類(夜)	B,C	39		
12	2	カエデ類(夜)	C	40		
12	8	サザンカ	E	22	2	
12	22	「ヒラギ」と名の付く木	F	6	1	
1	12	マツ類	C	6		
1	26	針葉樹	E	10	1	
2	9	展示植物(冬芽)	C	10	2	
2	23	展示植物	A	11	1	
3	1	蜜刺草	D	25		
3	2	蜜刺草	D	20		
3	8	蜜刺草	D	130		
3	15	ツバキ	B	23	1	
3	22	ツバキ	E	21		
3	29	ツバキ	C	19	4	
全42回開催				合計	866	42

表-2 年間参加者数と開催回数の推移（H16～19年度）

	H16	H17	H18	H19	合計	平均
参加者数(人)	589	1,199	1,062	866	3,716	929.0
開催回数(回)	48	68	61	42	219	54.8
1回当参加者数 (人/回)	12.3	17.6	17.4	20.6	17.0	17.0

(2) 植物園ガイドツアーの特徴

4箇年度の実施結果をもとに、植物園ガイドツアーの特徴を下記のとおり整理した。

(i) 恒常的なサービス提供

植物園ガイドツアーは、公園利用者に恒常的なサービス提供を果たしていることが特徴である。国営公園では、植物や自然を題材とする行催事は、開花・紅葉等の季節に合わせて1週間から数ヶ月までの期間限定で開催される場合が多いが、植物園ガイドツアーは通年で月2回以上開催され、年間開催回数も40回以上である（表-2）。

(ii) 繰返し利用者（リピーター）の増加

アンケート調査の結果より、年間に何度も参加する繰返し利用者（リピーター）が経年的に増えていること、及び平成19年度には10回以上参加した経験のある人の割合が参加者全体の42.4%に達することが分かっており、植物園ガイドツアーの特徴である（表-3）。

表-3 参加頻度の推移（H16～19年度）

	H16		H17		H18		H19		平均	
参加回数	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
初めて	291	76.8%	604	70.1%	270	45.5%	103	42.4%	317.0	61.0%
2～5回	57	15.0%	141	16.4%	115	19.4%	22	9.1%	83.8	16.1%
6～10回	10	2.6%	33	3.8%	68	11.4%	15	6.2%	31.5	6.1%
10回以上	21	5.5%	84	9.7%	141	23.7%	103	42.4%	87.3	16.8%
合計	379	100.0%	862	100.0%	594	100.0%	243	100.0%	519.5	100.0%

(iii) ボランティアの参画

武蔵植物園では、植物園内の花壇、展示、イベントなどを共同で実施する「都市緑化植物園ボランティア」（以下「植物園ボランティア」という）を募集しており、活動に賛同して参加したボランティアにより、知的障害者更正施設と協働で園芸作業を実施する⁹⁾など、さまざまな活動が行われている（表-4）。植物園ガイドツアーにおける植物園ボランティアの活動は、平成16年度から19年度までの4年間で、全219回開催中の158回、延べ302人の実績があるが、1回当たりのボランティアの活動人数が1.9人と少なく、また、現在は受付・誘導などの補助活動が中心となっており、内容の企画・案内解説の実施等のプログラム内容の骨格への関わりはない。これは、植物園ガイドツアーを実施するにあたって、案内する植物の知識と園内の植物に関する情報が必要であり、また、案内する活動を目的として募集したボランティアではないことが要因である。

表-4 植物園ボランティアの活動実績（H16～19年度累計）

ボランティア活動	人数 (人)	回数 (回)	回当人数 (人/回)
ガイドツアー	302	158	1.9
イベント活動	100	28	3.6
展示装飾	526	82	6.4
障害者施設との協働	528	288	1.8
花壇作業	434	148	2.9
ミーティング	1,009	48	21.0
その他	94	15	6.3
合計	2,993	767	3.9

(iv) 案内解説する植物や実施場所の多様性

植物園ガイドツアーは、季節ごとに開花や結実等の見頃となる素材を即時的に取り上げ、案内解説している。そのため、扱う植物もそれらが植栽もしくは自生している場所を歩いて巡るので、コースも多様となる。平成16

年度から平成 19 年度までに案内解説した植物の種類はカエデ類等の当初計画に則って植栽されている見本園植物 306 種類、アマナ等の植物園内に自生する植物 124 種類、企画展で展示したムラサキ・アサガオ等の展示植物 6 種類、修景目的などの植栽植物 40 種類、その他 3 種類の合計 479 種類である（表－5）。また、実施箇所についても、カエデ・公園庭園樹・花木等の各見本園、ボーダー花壇、苗圃など多様である。

表－5 案内解説植物
(H16～19)

カテゴリ	種類数
見本園 樹木	185
ハーブガーデン・ ボーダー花壇	121
計	306
全くの自生植物	111
自生植物 保護・育成・植え 戻しなどの対象	12
キノコ	1
計	124
展示 (ムラサキ・アサガオ等)	6
修景要素 (花壇・鉢植え等)	40
水生植物の池	1
苗圃 (通常公開せず)	2
計	3
合計	479

4. 博物館との比較による植物園ガイドツアーの考察

博物館の機能の面から植物園ガイドツアーにおける効果と課題について分析し考察するため、「博物館法」をもとに博物館の基本的な機能を、(i) 資料の収集保管、(ii) 調査研究、(iii) 展示・教育、(iv) レクリエーションに分類した。全ての博物館がこれらの機能を十分に果たしているわけではないと考えられるが、ここでは「博物館法」による博物館の定義と登録博物館として期待されている基準に照らし合わせて、武蔵植物園、及び植物園ガイドツアーにおける現状の比較を試みた。

(1) 博物館の機能から見た植物園ガイドツアー

以下に、博物館の基本的な機能の項目ごとに植物園ガイドツアーの特徴を考察した。

(i) 資料の収集保管機能

博物館における資料収集は、博物館の根幹をなす基本的な活動である。資料に対する扱いの点で、博物館はいわば深く・広く把握することに努めるため、関連する情報を質・量ともに充実させることができる。

これに対して武蔵植物園の資料は、園内に植栽される植物であるため、収集・保管だけではなく、育成することも求められる。また、ガイドツアーで資料を案内解説するためには、植物に関する科学的・文化的情報に加え、開花時期等の案内解説する対象物の季節変化を把握する必要があることも特徴である。

(ii) 調査研究機能

博物館では、資料に関する調査研究として、資料そのものに関する学術的研究だけではなく、資料の保存管理に関する科学技術的研究、資料の教育的活用に関する教育学的研究も行っている⁷⁾。研究対象や内容が広範囲であり、アプローチの手法も多角的である。

これに対して武蔵植物園では、ムラサキ等の苗圃で栽培する植物について、常駐する職員が栽培法や活用法についての調査・研究を行い、案内解説にも活用しており、また、開花情報を公園利用客への案内に供することを主

たる目的として、植物園内の植物の季節変化について日常的に調査している。しかし、武蔵植物園にて調査・研究を博物館レベルにまで充実させることは、人員の数的・能力的な面で困難だと思われる。

(iii) 展示・教育機能

博物館では、資料の活用について教育普及の面を重視し、具体的には生涯学習への取り組みや学校等の教育機関との連携を行っている⁷⁾。資料の展示においても教育的な活用という視点が重視されている。このように、利用者への教育的側面に重点が置かれている点が博物館の特徴である。

これに対して武蔵植物園では、おもに緑化に関する普及啓発や植物知識についての情報を発信することにより、都市緑化推進につなげていくという、教育普及の機能も有しているが、後述するように、レクリエーション面により重点が置かれている。

(iv) レクリエーション機能

博物館は、社会教育法の中で記述されている「主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）」である「社会教育」のための機関である⁷⁾。博物館におけるレクリエーションは教育活動の一環であり、楽しみながら学習することができる場を提供しているといえる。従来は展示等の一方的な情報発信が多かったが、近年では参加型の体験学習のメニューが充実した博物館も現れ、特に、「茨城県自然博物館」のように大芝生広場や遊具等の公園に匹敵する屋外施設を有する事例もあり⁸⁾、博物館におけるレクリエーションが多様化しつつあるといえる。

一方、大規模都市公園である国営公園は、都市公園法施行令の配置及び規模の基準に「多様なレクリエーションの需要に応ずる」と記載され、レクリエーションが主目的の場である。国営公園の施設である武蔵植物園も、レクリエーションをベースにした都市緑化の普及啓発が求められ、植物園ガイドツアーの中で実践されている。プログラム内容の魅力度向上や案内解説方法の工夫によりレクリエーションに独自性を持たせており、例えば、魅力度向上のためには、雪割草等の普段目にする機会の少ない植物の紹介、展示植物の日常観察から得られた新たな魅力の発掘、葉の香りや花の手触りといった普段意識しない感覚を用いることで印象を強める工夫、「紅葉ライトアップ」等の行催事との連携、などにより植物を素材として、多様な楽しみ方を提供している。また、案内解説については、職員が環境学習の指導者の資格を得る等、インタープリテーション手法導入の努力もしている。

(2) 施設運営面から見た植物園ガイドツアー

次に、博物館の機能面だけではなく、博物館が有する

(i) 専門職員の配置、(ii) 市民との連携、(iii) 評価制度といった施設の運営面における特性の観点から、植物園ガイドツアーについて考察した。

(i) 専門職員の配置

博物館における収集保管、調査研究、展示・教育等の業務は、法律により定められた専門教育を受けた学芸員により実施されていることが大きな特徴である。

これに対して武蔵植物園に配置される職員は、おもに造園や植物を専門としており、学芸員に担当する資格は求められていない。平成 19 年度にガイドに携わった職員 7 名は、教員免許・接遇検定・環境教育の指導者等の資格を有している。なかでも環境学習プログラムである「プロジェクトワイルド」の指導員資格を 6 名が取得している。なお、プロジェクトワイルドは、公園緑地・教育関係者、自然学校、地域での指導者が、より実践的、効果的に環境教育に取り組めるよう、平成 11 年に、米国から導入された環境教育プログラムである⁹⁾。これらの資格について取得等を推奨されているが、配置する際の必要条件として職員に博物館の学芸員に相当する教育訓練を義務づけていないため、業務内容については配置された職員個人の能力や経歴に左右される等、組織体制の整備や職員の資質向上面に課題がある。

(ii) 市民との連携

博物館では、学芸員が中心となり市民に対する生涯学習の場の提供や地域との連携を行っている。なお、多くの博物館では、博物館の有する資料は市民共有の財産であるとして市民のボランティアを受け入れ、展示解説のガイドを補助する活動のほか、資料整理、体験学習指導等の活動の実績がある⁷⁾。その場合、学芸員が専門的な見地からボランティアに対する指導を行うことができる。

これに対して武蔵植物園においては、植物園ボランティア活動のなかで植物園ガイドツアーへの参画がなされており、ある程度は市民との連携がなされているといえるが、主体的な役割を担うにはいたっていない。また、知識面や活動面でもボランティアの指導体制が整っていないため、ボランティアに十分な満足感を与えられない可能性があり、今後のボランティア育成が課題である。

(iii) 評価制度

博物館で都市公園分野と比べて進んでいる取り組みのひとつに、事業評価がある。具体的な動きとしては、博物館における事業の水準の向上や設置目的を達成させるため、「公立博物館の設置及び運営上望ましい基準」が平成 15 年 6 月 6 日に改正され、「事業の自己評価等」の項目が新規に追加された。また、個別の事業で見ても、調査・評価法の確立、工程ごとの評価の仕組みを持つ、展示業務に関する評価手法がある⁷⁾。

これに対して武蔵植物園では、「ガイドツアー実施記録」及び「アンケート調査」を記録として蓄積し、業務の改善等に活用を可能にしている。しかし、その運用においてはシステム面・手法面とも博物館の事業評価と同水準には達していない。

(3) 総括

博物館的機能や施設運営面から見た植物園ガイドツアーは、都市公園の本来の機能であるレクリエーション面

での強みがある一方で、案内解説の対象となる資料の収集、調査研究、対象の拡張、ボランティア育成を含めた体制の構築及び評価制度の導入については、今後の拡充が求められる。その方向性について下記の通り総括した。

(i) 連携による収集・調査研究

博物館では資料の収集や調査研究に力点を置き、その実施を担保する人員も充実している。これに対して、都市公園である武蔵植物園では、予算や人材に制約があり、博物館レベルの事業を継続することには困難がある。そのため、博物館的機能を強化する方策としては、専門家や博物館、その他研究・教育機関との連携による資料収集や調査研究体制の構築が考えられる。

(ii) 評価制度の導入

博物館と同様、都市公園にも指定管理者制度が導入されるなかで、管理運営上も事業を評価する仕組みが求められている。評価制度の構築が急がれるなかで、特に博物館と類似する事業については、博物館の先進事例を参考に検討し、都市公園としての特性と役割を確認しつつ、評価結果を管理運営に反映させていくことが求められる。

5. おわりに

本報告は、国営公園内の植物園で実施されている案内解説型プログラムの事例を博物館的機能から見て考察したものであり、博物館との比較により、国営公園が有する資源（資料）の魅力を伝える案内解説を目的としたプログラムである植物園ガイドツアーの博物館的機能及び施設運営から見た特徴について知見が得られた。

今後、公園利用サービスの効果をより明確化するためには、国営公園の都市緑化植物園以外の部分との関係を整理しつつ、ガイドツアー等に代表される公園の利用プログラム等の実施事例における企画・開発、準備・手配、実施に関する資料を収集蓄積するとともに、一般の植物園をはじめ、博物館・自然公園等の類似施設との比較により、利用者ニーズの把握、プログラム及び教材開発手法、人材育成に関する研究を展開すべきであると考えられる。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 20605017、「「博物館学」の知の導入と連携による公園の博物館的機能展開手法の開発に関する研究」）の一部として行われた。

参考・引用文献

- 1) Noriko Horie, Sadatoshi Tabata (2007): The Idea and the Role of Field-Museums in Japan: Journal of Landscape Architecture in Asia, vol.3, pp.202-207.
- 2) 建設省都市局(1975): 緑の相談所—都市緑化植物園—設置運営要領: 建設省都市局
- 3) 国土交通省総合政策局観光部(2001): インタープリテーションプログラムによる地域の誘客戦略づくりに関する調査報告書: 国土交通省総合政策局観光部
- 4) 一場博幸、安瀬智仁、古谷勝則(2008): 尾瀬ヶ原における望ましい日帰りの自然ガイドツアー実施方策に関する考察: ランドスケープ研究 71(5), 837-842
- 5) 小山未葉(2007): 東京における公園ガイドツアーに関する調査研究: 都市公園 No. 179, 108-111
- 6) 難波良憲、平松玲治(2007): 国営公園における社会的弱者に開かれた公園管理について: 造園技術報告集(4), 128-131
- 7) 全国大学博物館学講座協議会西日本部会編(2008): 新しい博物館学: 芙蓉書房出版
- 8) 茨城県自然博物館(2007): 年報第 13 号: 茨城県自然博物館
- 9) (財)公園緑地管理財団: プロジェクトワイルド HP: <http://www.projectwild.jp/aboutProjectWild1.html>, 2005 更新, 2009.1.13 参照

名 称: 国営武蔵丘陵森林公園
所在地: 埼玉県比企郡滑川町、熊谷市
公園管理者: 国営武蔵丘陵森林公園管理所
公園管理受託者: (財)公園緑地管理財団